JOFI東京通信

第 10 号 2022 年(令和 4 年) 2 月 11 日発行 https://jofi-tokyo.org/

東京都釣りインストラクター連絡機構会報誌

目次

コロナ禍を振り返って 2	1
	会長 鈴木 伸一
霞ケ浦での外来魚フィッシング	3
	小松澤 誠一
太公望	5
	宗圓 正義
清掃活動に参加して	6
	山本 剛生
私のフィッシング防護グッズ	6
	粕谷 正光
2021年の活動事業について	8
	新井 勝之
だから釣りは面白い	9
	菅野 健二
関東冬季 C&R 釣り場巡り	10
	鈴木 等
小さな絶滅危惧種調査	12
	小松澤 誠一
米国におけるライセンス制度につ	いて14
	鈴木 伸一
2021 年度活動実績	16
編集後記	16

コロナ禍を振り返って2

会長 鈴木 伸一

昨年もデルタ株、オミクロン株と言った新たな変異株の出現など、新型コロナウイルス感染症に振り回され 続けた1年であった。

1 月にパシフィコ横浜で開催を予定していた釣りフェスティバル 2021 は、時節柄リアルな開催は断念し、史上初となる Web 上での開催のみを余儀なくされた。それに伴い、一昨年末は全釣り協も急遽 Web 開催の対応に追われた。たまたま JOFI 東京では 2019 年末よりホームページに動画を取り組む試行を開始していたことが功を奏し、ちょうど編集を完了したばかりの「奥多

摩ヤマメ発眼卵放流 2020」(JOFI 西東京への応援参加)の様子(動画)を釣りインストラクター活動例として公開することができた。



やはり、これからの情報提供には動画が一番インパクトもあり主流となることは間違いないようだ。また、いくら活動を続けたとしても的確な情報提供ができない限り、JOFI の存在は世間から認めてもらえないのではないだろうか?JOFI 東京においても、時流に乗り遅れることがないように、若い方々を中心に専門の情報共有・提供プロジェクトを立ち上げたいと思っているのでご協力よろしくお願いします。

さて、今年度の活動状況はホームページをご覧になれば一目瞭然で、東京都からの要請もあり、ほとんどのイベントを中止せざるを得なかった。予定していたもので実施できたものといえば、東京都に発令された緊急事態宣言が解除された間隙に実施した若洲海浜公園釣り場クリーンナップ作戦(それも一般参加者は募集せずに)、奥多摩ヤマメ発眼卵埋設、第6回「ファミリー釣り教室」(参加者人数を12組24名とし、JOFI東京としては非公式)くらいであり、多くの会員の方々にはJOFIとしての活動参加ができなかったことには申し訳なく思っています。

そんな年ではあったが、10月に入り、予想外に東京 都における緊急事態宣言が解除された。このチャンス を何とか生かせないものかと、日頃温めていたライフジ ャケット着用講習会に関し、先ずは渡良瀬漁協の組合 長と連れだって国土交通省関東地方整備局渡良瀬川 河川事務所に説明・相談に伺った。河川事務所も快く このイベントに関し理解を示していただけ、その場で渡 良瀬川 足利地区左岸河川敷(鹿島橋下流)の一時 使用許可の確約を得ることができた。しかしながら、コ ロナ渦、残念ながら今回は一般の参加は見送ることと し、急遽水産庁、足利市消防本部、全国内水面漁業 協同組合連合会、栃木県漁業協同組合連合会、全日 本釣り団体協議会などの協力を取り付け、水産庁 資 源管理部 漁業調整課、足利市河南消防署から講師 をお招きし、主に渡良瀬漁協、栃木県漁業協同組合 連合会、JOFI 栃木、JOFI 東京、World Fly Fishing of Japan、Japan Fly Casting Club のメンバーなど、 どちらかといえば普段釣りの指導に携わる方々と全員 参加型の「水難事故防止セミナー」として実施すること とした。

内容は法改正、ライフジャケットの安全基準、ライフジャケットのタイプ別機能・特徴、渡良瀬川における危険箇所(渡良瀬川河川事務所から河川断面図の提供を受け)、水難事例・救助方法などの座学を始め、ライフジャケットのタイプごとに実際に陸上・河川内において動作確認など多岐にわたったが、何よりも自らの所有するライフジャケットがいざというときにどのように動作するかが確認できたことは大変意義深いものであり、漁協の方々からも深く感謝された。



今後もこのような活動は是非続けていきたいものである。

話は変わるが、柳瀬川でマルタ釣りを始めて 10 年ほど経つが、10 年目(昨年)にして初となる経験を 2 度もしてしまった。

マルタの婚姻色はオスだけでなくメスにも現れるし、メスもそうであるがオスにも現れない個体が存在する。そのため産卵期であっても雌雄の判別は目視では困難なことが多く、確実に判別できるのは掛かった個体に数匹の個体がついてきた場合には掛かった個体はメス、釣れた個体から卵が零れたらメス、精液が零れたらオスと言うくらいであろうか?



今回いくつもの偶然が重なったようで、先ずはボトム

フライにメスが掛かり、浅場でのランディング寸前にそのメスに追従していたオスがドロッパー(枝針)を咥えてしまい、たまたま2 匹ともこちらを向いていたところを走られることもなくタイミング良く岸まで引き寄せることができてしまったようだ。いずれも体長55cmを優に超す個体であり、常識的にはこのような良型がダブルでランディングできることは考えられないことであり、2 度とこのような経験をすることはないであろう(このときも一見オスのように見える幅広で婚姻色が強く出ているものから卵が零れた)。



4月11日、マルタの産卵場から1km ばかり下流の流れの緩いプールでオイカワ釣り(フライフィッシング)をしていたときのことである。何やら見かけない眼の大きな幼魚が釣れてしまった。ミニチュア・ネットの長さが柄を含めて5cm であるから、これも常識では考えられない小さな魚(マルタ)が毛バリで釣れたことになる。比較的口の大きいオイカワでさえ、このサイズともなればライズの雨であってもまるでお手上げである。なお、地元の方にお聞きしたところ、GW明け頃までは餌釣りでもマルタの幼魚が掛かることがあるそうだ。マルタの幼魚はそのころ一斉に降海するのであろうか?いつか自分の目で確認したいものであるが、そのころは渓流釣りで忙しく、いつのことになるのやら・・・・・

殊に淡水魚においては、アユやコイなどのように商品価値の高いものを除けば、図鑑や専門書を調べたところでその生態は不明確なものが多く、謎に包まれたものがほとんどである。その点、その魚のエサとなる水生生物の方がよほどその生態に関した記述は多く見つかるものである。私の知る限り、水生生物の研究者は実際に現場に出て、調査・観察・採取と言ったことは本人自身がやっているものである。それに対し魚は(釣りをやらない方にとっては)採取が難しく、魚類学者は現場に足を運ばない方が多いのではないだろうか?こんな

ことでは目的の魚がどのような環境の下で生息しているかが分かるとはとても思えない。

かつて静岡県のレッドデータブック作成の際、県から協力依頼を受け、大学の先生方と大井川上流(椹島近辺)へ調査に出かけたことがあったのだが、なんとイワナの採取に大の大人が一列に並んで玉網で臨んだときにはびっくりしてしまった。この人達(学者)、果たしてイワナの習性を知っているのであろうか?案の定、魚はいるにも関わらず、当日は1匹も採取できなかった。

今日のように DNA 解析の技術が進歩してくると、他人が採取した標本からでもいくらでも論文が書けるようになってしまった。確かに DNA 解析を根拠にされてしまうと分類上のテーマに関しては反論の余地もないが、生物の研究はやはり見た目とか生態に重きを置いてもらいたい。そうでないと生き物が身近なものにならないのでは?

DNA 解析重視はあまり好きではないが、DNA 解析が思わぬ成果をあげる例もある。槍ヶ岳に源を発し南流する梓川は、かつて焼岳の噴火により堰き止められる(古上高地湖)以前は高原川、神通川を経由して日本海へ注いでいたと言う説がある。この説に対し、10年ばかり前のことであったろうか?水生昆虫談話会(上高地合宿)に参加させていただいた際、信州大学の東城幸治先生から「永年にわたって(少なくとも数十万年前には定着し)生息し、移動分散力が極めて弱いと考えられているオビカゲロウを対象に、遺伝構造の解析結果、かつて梓川は高原川経由で日本海に注いでいたことが立証できた」旨お聞きしたことがある。DNA解析もアイデア次第では分類学以外にもいろいろと活用できる技術のようだ。

霞ケ浦での外来魚フィッシング

小松澤 誠一

2019 年末から始まった COVID-19 の感染拡大により、色々な行動に大きな制限を受けることになりました。

3 密の回避、県境をまたぐ移動の禁止、不要不急の外出の制限などにより、私の所属している釣りクラブのイベントも軒並み中止をせざるを得ない状況となってしまったことは言うまでもありません。

とは言うものの、日本の感染対策は、海外の「ロックダウン」のような強制力を伴う制限とは違い、あくまでも「政府からの要請」ということもあったため、3 密に繋がらない「釣り」や「キャンプ」などのアウトドアアクティビティは「黙認」どころか「推奨」される傾向があったことが功を奏し、私も漏れなく近場での個人的な釣りを積極的に実践することにしてみました。

例年であれば、特に計画も立てず、天気予報を見な がら思うがままに好きな釣り場に出かけていた訳です が、「緊急事態宣言」や「まん延防止等重点措置」の長期化が避けられないことを何となく感じていましたので、同じ釣り場を足繁く通うようなスタイルになるだろうと想定していました。

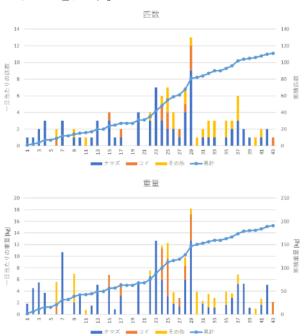
そうなると、ただ漠然と釣りをしていても面白味に欠けますので、2021年は釣果の記録を残して、統計を取ってみようと思い立った訳です。

私が実践している釣り方は、ウェーダーを履いて湖の中を歩き回りながら釣る、いわゆるウェーディングです。湖に立ち込んだ状態で魚の「長さ」を計測するのは難しいので、「重さ」を記録の対象としました。

釣りのスタイルは、道具が一番揃っているという理由から「フライフィッシング」です。

メーンターゲットは、アメリカナマズ(正式名称:チャネルキャットフィッシュ)ですが、同じタックルで釣れる魚種は意外と多いので、釣れた魚は全て記録に残すことにしました。

2021 年 4 月頭から 10 月末までの統計結果は以下のグラフの通りです。



釣行回数 43 回、総数が 111 匹、総重量が 190.8kg という結果で、釣果というよりも、もはや「漁獲高」に近い数字になったかもしれません。

仮に、釣れた魚が 1kg あたり 1,000 円(高いかな?) で売れたとすれば、約 19 万円稼ぐことができた訳ですが、半年以上かかってこれだけの金額では、余裕のある生活はできそうにもありません。

漁業の厳しさが良く分かります。

釣果状況としては、春から初夏にかけて数が伸び、真 夏以降は渋い状況が続く傾向となりました。

しかしながら、雨や風の影響で釣りができない日も多くありましたので、今回の結果だけでは精度に欠ける部

分も多くあるだろうと感じています。

本命のアメリカナマズは合計 71 匹、総重量 128.7kg、 平均重量が 1.81kg という結果でした。

一番の大物は10lb(テンポンド:約4.6kg)で、俗に言う「トロフィーサイズ」と出合うことが出来ました。



コイは合計 12 匹、総重量 26.2kg、平均重量が 2.18kg でした。

その他の魚種には、「ブラックバス」「ニゴイ」「ハクレン」「ダントウボウ」が含まれます。

ブラックバスは、累計で 6 匹。ここ十数年では一番の 釣果です。



ハクレンは2匹。その内の1匹は1mほどの大きさがあり、5kgのバネばかりでは重さを計ることはできませんでしたので、記録上は5kgとなっています。



「ダントウボウ」というのは、中国から輸入されたコイや ソウギョに混ざって入ってきたとされているヘラブナに 似た魚で、霞ヶ浦ではここ数年で良く見かけるようにな るほど数を増やしています。



これらの魚以外に、霞ヶ浦には「ボラ」が沢山います。 ただし、アメリカナマズをターゲットとした釣り方では残 念ながら釣ることができません。

ボラを対象魚として狙うかどうかは今後の課題にしたいと思います。

今回記録を取ってみて改めて思い知らされましたが、「ニゴイ」以外の魚は全て外来種であり、霞ヶ浦ではもはや外来魚しか釣れないと言っても過言ではない状況です。

これには私の釣りのスタイルの影響もあると思いますが、それだけでは説明がつかないほど外来魚が占める

割合が圧倒的です。

私のような純粋に釣りだけを楽しみたいと思っている 釣り人にとっては釣れる魚種はどうでも良い話なので すが、漁業従事者や環境保全活動家にとっては由々 しき事態なのではないかと感じてしまいます。

霞ヶ浦の外来魚も、COVID-19 同様に「まん延」していると感じざるを得ません。

外来魚まん延防止のための「ワクチン」が開発される 日が来ることを期待するしかなさそうです。

最後に、釣りの統計を取ると色々な発見があり、来年 以降の釣行計画にも役立つ情報が得られると感じましたが、その反面、釣りに行くことが「義務」のように感じてしまう傾向がありますので、実践の際にはご注意を。

太公望

宗圓 正義

今から、46年程昔の話しです。

イシダイに憧れ、釣りたくて、磯釣りクラブに入会しました。そして、1年位たった時の話しです。

所属したクラブの月例会の多くは、伊豆大島で開催される。この大島でイシダイを釣り上げるには、遠投有利と言われている。80m 以上は投げる必要があると皆が言う。イシダイとは、1 貫目以上の事であり、それ以下は、シマダイと言われていた。当然、そのため練習と特訓を毎週末に行う。荒川、多摩川の河川敷で行われた。

先ず、キャスティング。当たり前だか、エサを付けて80m以上投げるには、オモリだけで100m投げれるのが目標となる。クラブの先輩は120m以上投げれる方が3名いる。最長140mも投げてしまう。今のようにカーボンロッドなんかない!釣具メーカー大丸なんかまだ出ていない。グラスのNF17にジグマスターに16号のナイロン道糸を巻き、オモリ30号で投げるのだ。スクイダーなんかに巻いたら、空中で道糸が全部出しきってしまう。自分も1年の努力でなんとか90mは飛ばせるようになってきた。

次に、取り込みの練習に移る。これが、地獄なのだ。河川敷に 50m 測定用の巻尺を 2 回延ばすのだ。準備係りは、大体若造の自分にまわってくる。 先程練習したイシダイ道具に自動車のタイヤを縛り、100m 先に引き出し、そこから手前まで引っ張ってくるのだ。簡単な作業だ。だが、やればわかる。拷問が始まる。 先ずは軽自動車のタイヤ、次に乗用車のタイヤ。 くどいが、イシダイとは、4kg 以上である。軽自動車のタイヤでは、4kg 以下なので役不足なのだ。 力を、入れても、入れても動かない。何とか 100m 先から引きよこしても、先輩から「お前、イシダイが釣りたくてないのかよ!」と怒鳴られ、第 2 ステージの普通乗用車のタイヤの練習に移る。これが全く動かない。 力も限界だが、それ以上に

竿を支える竿尻を下腹部にあて引き寄せるファイティングスタイルにするのだが、竿尻が食い込み、下腹部に穴が空くのではないかの激痛に堪えながら先輩の激が飛んでくる。イシダイは釣りたい、でも痛すぎる!皮膚の皮がずる捲れてくる。



こんな特訓をして1年位経った時の話しだ。 場所は伊豆大島のトーシキ磯。A 級ポイントと呼ばれる磯だ。

同時に2台の車が磯に横付けした。他のクラブの方も自分の先輩も同じ狙いのようだ。流行る気持ちを押さえて、ではない。誰よりも仕掛けの準備を早く終わらせ、誰よりも仕掛けが海の中に多くあれば、確率的にヒット率も上がる作戦だ。マメにエサを打ち返してやり、誰よりも遠投するのが、イシダイを釣るコツと、目一杯頑張り投げようとした瞬間、ふと横に入った釣り人の方に目が行った!

なんと、もう仕掛けが海中に入り、糸が垂れている状態で、その方の視線は穂先を見ているではないか!自分がこんなに急いで準備をし、練習に特訓に堪えてきた自分をあっさりと。あり得ない。信じられない。

もうその事は負けを認め、本題であるイシダイ釣りに集中しょう。

そろそろ仕掛けを巻き上げ回収しよう。またその時隣のベテランが気になった。回収しようとしたが、穂先を見つめイシダイの気配を探っているようだ。焦って落ち着きのない初心者の自分が恥ずかしくなり、イシダイのタイミングはもう少しまたなくてはならないのか。自分のようにせっかちに打ち返してはイシダイは釣れないのか。流行る気持ちを喰い縛り、ここは我慢と真似てみた。15分がたち、30分が過ぎた。信じられない。我慢の限界だ。だがやはり隣の大先生を見ると、優しく穂先を

う~ん、堪えれない。我慢出来ない。イライラする。1 度目の投入してから1時間を超えて、隣の大名人が動いた。

何やら背負ってきた竹籠から袋に入った長い物を出した。

なんか長い望遠鏡みたいな物を出した。 そうか、今日は中々アタリが出ないので、地形を詳細

見つめている。

に観察し直し、作戦を練り直すのだな。そうか、そう言う 手があったか、流石大名人の先生だ。

う~ん?

少々遠くて良く見えないが、望遠鏡では、ないようだ。 笛の様に見えるのを口に当て?尺八? あれっ?

気になって、隣の磯に失礼であるが行く事にした。 横に見えても、100mも磯歩きをするのはしんどい。 オジさん、何をしているのですか?

お兄さん、ゴメンな。下手な尺八を吹いていて。 イヤイヤオジさん、釣りは?イシダイ釣りは!

そこに、エサならトコブシを 1kg 用意してきたから、何ならお兄さん、エサ付けて投げてくれるかい。

えーつ!!・・・・・・。

エサ付けてないの?オジさん。・・・・・・・・。

失礼でおせっかいと思ったが、エサを付け、遠投せずにオジさんが垂らしていた足元に投げ込んだ。

自分に腹ただしいよりも複雑な心境で釣りに集中出来ない。

先ず、ここに来るのに竹芝桟橋から東海汽船に乗る 旅費、宿代、エサに考えたら、いくら旅費掛けて尺八を 吹いているのか。

きっとオジさんの目には、昔イシダイに引き込まれて 舞い込んでいく剛竿が映っていたのだろうな。

今、自分は還暦過ぎたが、まだまだ沢山釣りたい。ど うやら、自分はまだ仙人の領域に達していないようだ。 永遠に。

清掃活動に参加して

山本 剛生

初めまして山本剛生と申します。2021 年に JOFI に入会させて頂きました。

2019 年までは北海道に在住してまして、川、海の色々な釣りを楽しんできました。得意分野はルアーの 渓流釣りです。

関東に来てからも色んな魚を釣りたく、日々釣り場に 足を運んでおります。

インストラクターの資格を取得しようとしたきっかけは、 こんな楽しい遊びを沢山の人に知ってもらいたいと考 えたからです。

※私は、釣りはスポーツではなく、娯楽と考えております。なので、見た目も大事!

ただ、自分もそうでしたが釣りは自然、魚との駆け引きが大切で、やればやるほど奥が深いと思っております。これからはじめる人に釣りの楽しさを知ってもらう為、少しでもお手伝い出来ればと思い資格を取りました。しかし、緊急事態宣言下の中、なかなか指導する機会が無く残念に思っております。

今回は、若狭海浜公園の清掃活動に参加しました。 今回で2回目の参加ですが、改めて思う事はゴミが多い!

緊急事態宣言下の中、釣り人口が増えたとニュース 等で見て嬉しい事ではありますが、同時にマナーの悪 い釣り人も増えていることも実感しました。

マナーの悪さから、釣りが出来る環境、例えば漁港の 釣り禁止など、増えてきております。

我々インストラクターは、釣りの楽しさも伝える事だけでなく、釣りが出来る環境を守って行く事も大切な事であると、清掃活動をするたびに強く感じております。

こうした我々の活動を見て、ゴミの持ち帰りを意識して下さる方が増えればいいなと思います。清掃活動は決して楽しくないですが、「ありがとうございます!」と声を掛けて下さる方も多くそれが嬉しいですね。



今後は、釣りの楽しさを広める事と、釣りの出来る環境 を守る活動を頑張りたいと思います。

皆様、ご指導の程、宜しくお願い致します。

私のフィッシング防護グッズ

粕谷 正光

1. 頭の防護



大岩に飛び乗った際に、砂のついた靴底により足を 滑らせ、なす術も無く川に落ちたとき、かぶっていた厚 手のハットで頭部の打撃は避けられました。この経験から、ヘルメットの必要性を考えていたのですが、釣り専 用のヘルメットは見つかりませんでした。仕方無しに、 革製のクロッコダイルハットの内側に薄いプラスティック 板を入れて使ってみたり、登山用ヘルメットにヒサシを 追加工して着けて使ってみたりしましたが、今は市販 の帽子にミドリ安全の帽子用インナー保護キャップを内 蔵して使っています。



2. 眼の防護

偏向サングラスは魚影を探すアイテムでは有りますが、 釣り針から眼を守る必須アイテムでもあります。

自身や他人の投げた釣り針は何時、凶器となって襲って来るか判りません。特に河床の根掛かりを外そうとして引っ張った時には鉄砲玉となって自身に向かって来ます。

その昔、デジカメで魚体を撮影する際に邪魔なサングラスを足元に置いて、一連の作業を終えて立ち上がった瞬間に踏み潰してしまった経験がありますので、私は眼鏡と、サングラスを跳ね上げる二重構造品とし、眼鏡のツルにピッタリとしたストラップを着けて使っています。

3. 膝・肘の防護

これも、岩盤の上で膝を思い切りぶつけた経験から、バイク用、膝、肘プロテクターを着けています。

膝用は必須で、ランディング後の膝をついた作業でも ウェーダー保護に役立っています。

4. 手の甲の防護

手の甲をガード硬化した、指先が出る革製のバイク手袋を、あくまでも甲を守る為に使っています。

5. 水没からの防護

背中と胸にフローティング材が入ったフィッシングベストを使っています。このフローティング材は背中への衝撃干渉効果も期待しています。

これも過去の経験ですが、初参加のスコットランド世界大会では、いきなり水際で躓いて、自動膨張式ライフジャケットのセンサーに水をかぶせ、膨張させて審判員に大笑いされた経験が有ります。その他にも、ガスボンベは機内持ち込みが出来ないので、現地調達しなければならないのですが、ポーランドでは入手出来なかったことがあります。

6. 急流の水圧防護

ウェーダーは鮎用のクロロプレーンドライタイツのソックスタイプを使用しています。このタイツは足にピッタリとしているので、耐水流、水圧に優れています。チェコニンフ釣法はポイント近くまで立ち込まなければ成り立たない釣法なので、スラックスタイプのウェーダーでは水圧に煽られて、抵抗感が大きいけれど、鮎タイツはこの水圧を逃してくれます。

鮎タビと組合せて使うのが常道ですが、これに SIMMS のウェーダーシューズを組合せると安定感が あります。

但し、ゲートル部分にはカギフックをつけて、ズリ上がらぬ様に細工して、砂がシューズ内に入らぬように対処しています。

黒のタイツはスズメバチの襲撃が気になりますが、頭には、今流行りの天敵オニヤンマの自作フライを帽子に装着しています。スズメバチへの効果は不明ですが、人が話し掛けて寄って来る効果はあります。



7. 腰ベルトの装着

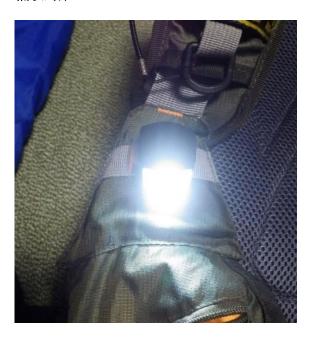


胸までの水没でも、浸水が腰以下に進むのを止める 効果を期待してベルトをしています。

その他にも、このベルトには、杖のスタッフ、自動開閉 傘、クマ避けスプレー、ナイフを装着しています。

特に自動開閉傘は、猪の撃退用として用意してはいますが、効果は判りません。

8. 闇夜対策



肩のショルダーループには自転車のハンドルに装着する LED ライトを常に括りつけています。ループに通した一体型のゴムバンドを八の字に捻って取り付ければ、しっかりと固定されて、落ちる事はありません。白状しますと、これは百均商品で防水ではないのですが、中身を取り出して、サランラップで密閉してからケースに戻しています。大雨にさらした後も問題なく点灯しています。

9. 鳥獣駆逐対策

ベストの左前ポケットには火薬スターターピストルを入れています。川原に置いたリュックの中から鳥に昼飯のオニギリを盗まれた経験が有りますが、これで追い払えるかは不明です。

10. 防虫ネット

帽子の上から被せるネットは顔の周りを飛び回る、ブョに有効です。大群でなければ防虫スプレーで対応する為にベストには防虫スプレーも装備しています。

11. 音波通信器としてのホイッスル



口に咥えて大きく吹けば、沢の音で声の届かぬ遠く 離れた釣友も振り向いてくれます。

12. 根がかり外し

ダイワの鮎用根がかりはずしを使っています。冷たい水の中に肩まで手を突っ込むことも無く、ほぼ 90%の回収率を誇ります。河床を感じながら、鱒を狙うチェコニンフ釣法には必須アイテムです。

総重量 7kg

背中にはホースの吸口が着いた、2 リットルの給水バッグを入れ、救急用の毒虫ポイズンリムーバー、バンドエイド、抗生物質軟膏、頭痛薬、こむら返り治療 68 番漢方薬(ドーピングチェック対策としての漢方薬の成分分析は不明です)、日焼け止めクリーム、そして雨合羽、胸にはタングステンビーズニンフ用ボックス、勿論、通常のフライボックスも備えています。

他人はそんなに重くして背負わなくてもと言いますが、 これは深く立ち込んだ時に感じる浮力による不安定さ の防止をも担っています。

何より、一度川に入ったら、その場で対処出来る様にして、1分でも無駄にしない、3時間の試合を意識した装備です。コロナが収まりフライフィッシング世界大会が再び開かれますように。

2021年の活動事業について

新井 勝之

今年も昨年に続きコロナ禍に始まりコロナ禍に終わろうとしていますが、昨年とは違い、10 月からコロナ患者が減り、小規模の釣り教室や、追加事業として、水難事故防止セミナーを行い、その他(活動実績を参照してください)の活動も行えた事は昨年よりは充実した感じがしました。このままの状態が続くことを祈るばかりです。

水難事故セミナーですが、鈴木会長の肝いりで、栃木県足利市の渡良瀬漁協 会長 石井利明氏(JOFI 東京会計部長)の協力で行われましたが、レジャー中の水難事故でライフジャケットの装着有り無しでは死亡率が大幅に減少することや、実際にライフジャケットを装着しての浮力や、膨張型が開いた時の違い等を検証できたことは参加者に大きな有意義になったと感じました。

コロナ禍で、相変わらずアウトドアレジャーに注目が 集まり、手軽なキャンプ&バーベキューや釣りで、特に 海では堤防釣りが人気になっていますが、マナーの悪 さ(ゴミの始末、駐車、立ち入り禁止区域への侵入等) から締め出しを受ける事になった場所もあります。

テレビニュース等でも危険な為に釣り禁止の堤防の柵を乗り越えて侵入する釣り人が後を絶たずで、インタビューを受けても、「釣れるから」とか「いつも来る」等、あきれるばかりで、どうしてこの場所が釣り禁止になっているのか?全く理解せずに自分は大丈夫、事故に合うはずがないと思い込んでいるのでしょうし、事故に合う人のことなど他人事のように考えていて、自分は気を付けて釣りをしていれば!誰でもそう思いがちですが、釣りは水辺で行うものなので常に危険と隣り合わせである事を忘れずにいて欲しいです。

平成30年3月15に国土交通省の報道向け発表資料によると、「地方創生を目的とした観光の取組みを政府全体で進めている中、港湾局では、観光資源としての既存インフラの有効活用や港湾における文化振興の一環として、港湾における釣り施設や既存の防波堤の利活用を進めています。

これらの取り組みの一環として、日本釣振興会との連携により、平成30年度に全国35港において釣り体験教室等のイベントが開催されます。また、日本釣振興会等と連携し、青森港、秋田港の2港において防波堤の一般開放を進めるための検討会を設置しており、今年夏頃の試験開放に向けて、関係者との調整や安全対策の検討を進めます。」

この発表後の平成 31 年 2 月 4 日時点、「釣り文化振興モデル港」として 16 の施設が出来ましたが、釣り人目線の私たちが所属する「全日本釣り団体協議会」はガイドラインを決める協議には委員としての参加者はいませんでした。道具を売る立場の「釣り振興会」が入っているのに肝心な釣り団体が含まれていないのは大いに不満ですね!知名度が無いからなのか?このような協議は結論ありきで早急に決めるのであれば自分たちに都合の良いメンバーしか選ばれないのか?解りませんが、私たちの活動で釣り指導はもちろん安全な釣りへの啓発、清掃活動、放流活動にもっと積極的に取り組む事で存在感を上げたいです。

だから釣りは面白い

菅野 健二

今朝も、まだ空が夜の色を残す中、私は車のエンジンをかける。

気が緩めば、すぐにでも布団に飛びこめそうなほどに 寒い。

きっと、こんな状態だろうからと、昨晩のうちに準備をしておいてよかった。

タックルを車に詰め込んで、釣り場を目指す。家を出る前につくったカフェオレは、まだ熱い。

どんな魚とファイトできるのか、期待に胸を膨らませる。 もう若いとは言えない年齢だが、ワクワクする。

信号待ちの、前方の車のテールランプをなんとなく眺めながら想像する。

天候は?水温は?ラインの強度は十分か?このコンディションならばこのアプローチだろうか?

今日はあまり慣れていない、いわゆる自然の川、ネイ ティブフィールドで釣りをする。

考えることは尽きることがない。

私が釣りを始めたのは比較的遅いほうだと思う。まだ 10年も経っていない。

釣りの世界からすればヒヨッコもいいところだ。

元々、釣りには興味がなかった。とにかく待つ、のんびりした遊び、という印象しかなかった。

だが、釣りに触れていくにつれて、そんな印象が覆されることになる。

そんな釣りと私の接点になるのは、長い付き合いの友 人だった。

およそ 10 年前、友人と共通の知り合いのいる長野に行った時のことだ。

そこは山間部で、自然の美しいのどかな風景の広がる場所だった。

長いドライブの後、目的地である知り合いの親戚の家が見えてきた頃、そこには道に沿うように沢のような側 溝があった。

友人はおもむろに竿を取り出し、釣りを始めたのだ。 すると、30 分程で見事に 3 匹の魚を釣り上げた。

そこで見たものは、まだ生命感のある、25 センチ前後のアマゴだった。

私は、実際に釣り上げる技術とともに、ただ焼いただけにもかかわらず絶品だったその味にも驚いた。

私が釣りというものに魅了され始めたのはこの時からだったのかもしれない。

やがて、私の車は釣り場近くの駐車場に到着した。 先行者はいるだろうかとあたりを見回しながら、タックルの準備を始める。

私は主に管理釣り場で釣りをしている。 内陸に点在しており、アクセスしやすいのが利点だ。 そして、無条件で魚がいる上に、放流もする。

私はそんな管理釣り場での釣りに没頭することになる。 しかし、魚を釣るというのはそんなに簡単な事ではな い。始めた頃は、とにかく釣れない。

ロッドが、とかルアーが、とか言い訳をしてみても、とに かく釣れない。

手の届きそうなところで、魚たちは悠々と泳いでいる

結局、タナと時間帯や季節などを理解するまでは、毎 度のように悔しい思いをしていた。

徐々に大きくなる川の音に挽る気持ちをおさえながら、 釣りのポイントへ降りていく。



この場所は何度か来ている。対岸までの距離も程良く、 張り出した大きな岩の影などもあり、十分期待できるの だが一度も釣れていない。

私は最近のトレンドであるヒラを打ちやすい扁平のミノ ーをキャストした。

何度かキャストしてるものの、アタリはない。ここでムキ になって際どいところを狙うと、失敗しルアーをロストし かない。

私は一息ついてルアーケースを取り出した。

管理釣り場で釣りを始めて、さまざまな所で釣りをした。 東京、神奈川、埼玉をはじめ、山梨、群馬、栃木、静 岡と、仕事の休みには手あたり次第釣り場を回った。

そこで、あらゆる攻略法を学ぶことができた。

今、思い返せば顔を覆いたくなるような恥ずかしい失 敗や、思いもよらないことで他の釣り人に迷惑をかけて しまったこともあった。

紆余曲折を経て、私は安定した釣果を得ることができ るようになっていった。

川の音は爽やかで、時折激しく、私が釣りをしている ことを実感させてくれる。

水量が多く、川の流れは見た目よりも強いと判断し、 細く、丸みのあるミノーを選択した。

水中での動きは安定すると考えたからだ。

数回、キャストする。アタリはない。

厳しい結果が私の頭をよぎり始めた時、ふいにドラグ が鳴った。

陽の光を反射してキラキラと光るラインが水中に引き 込まれる。

私は興奮のまま、リールを巻きあげた。

その先にいたのは、魚体の美しいヤマメだった。

待ちに待っただけに、嬉しい。

たった一匹だとしても、管理釣り場で数十匹釣り上げ た時と遜色なく、嬉しかった。

私は JOFI 東京で、ヤマメ発眼卵の放流の活動に参 加させてもらっている。

この時釣ったヤマメが、はるか上流から、発眼卵から 孵って下ってきた魚だとしたら、なかなか感慨深い。

釣行の帰り、すでに冷めてしまったカフェオレを口に ふくみながらそんなことを考えていた。

関東冬季 C&R 釣り場巡り

鈴木 等

毎年9月末に解禁終了すると、渓流釣りファンには寂 しさを感じる時期になる。一方で昨今、禁漁期にオー プンするニジマス対象の冬季キャッチ・アンド・リリース 釣り場(以下冬季 C&R)が増えている。年間を通じキャ ッチ・アンド・リリースで釣ることの多い自分には、冬季 C&R は禁漁期においてもフライフィッシングが楽しめ る貴重な釣り場となっている。 冬季 C&R には以下のよ うな魅力がある。

- •基本的に自然河川を利用しているので、自然な川の 流れの中での釣りができる。
- ・魚がいる。(ただし、魚影の濃さは釣り場により大きく 差がある)
- 大型ニジマスが釣れるところが多く、ファイトを楽しめ る。
- ・手頃な料金。(日釣り券が1000円~2000円が主流)

本稿では2021年10月以降に訪れた関東圏の冬季 C&R を紹介させていただく。自分が知る限りにおいて は、利根川の冬季 C&R を除き、これで網羅できている と思う。

① 第川 C&R ールアー、フライ、テンカラ(栃木県)



栃木県北部にある那珂川水系の支流で、塩原街道沿い(国道 400 号)の布滝から福渡県営駐車場までの約 2km。瀬、落ち込み、プールの連続で、区間全域に魚が入っていてサイズは 30~50cm 超。自然なままの中流域渓相の中で釣りができる。紅葉の名勝地でもあり、錦秋の中での釣りが楽しめた。

②川治温泉 C&R(男鹿川、鬼怒川)ールアー、フライ、 テンカラ(栃木県)



川治温泉街の中を流れる川が C&R 釣り場になっている。渓流釣りができるのは小綱ダムのインレットである二つの川の合流点から鬼怒川側が川治ダムまでの約 1km、男鹿川側が五十里ダム下流までの約 1.5km である。男鹿川の温泉街区間だけしか釣りはしていないが、魚影は濃く 60cm を超える大物を釣るチャンスもある。川岸には露天風呂もあり、歴史ある温泉街の風情の中での釣りは一興である。

③渡良瀬川 C&R—ルアー、フライ、テンカラ、餌釣り (栃木県群馬県境)

利根川水系の支流である渡良瀬川の栃木県足利市近郊に設定されていて、鹿島橋から田中橋までの区間

約 4km がエリア。2021 年から始まった釣り場である。 本流と言える川幅、水量のある河川であり、それでいて 場所によっては川幅が狭まり渓流的な流れもある。フラ イ釣りでは渓流用のシングルハンドロッドと本流のダブ ルハンドロッドでの両方の釣りを楽しむことができる。大 河川の場合は放流魚量が多くても魚影が濃くはならな いが、放流地点近くの居着いているところを狙えば、本 流での大物釣りが楽しめる。

④神流川 C&R-ルアー、フライ、テンカラ(群馬県)



利根川水系の支流である神流川の上野村ふれあい館下に設置された700mほどの釣り場である。ここの特長は何といってもハコスチと名付けられた引きの強い種類のニジマス釣りが楽しめることである。川には段々状のプールが人口的に設けられていて自然渓相とはいいがたいが、各プールには大量のハコスチが泳いでいるのが見える。スレている魚も多いので、見えている魚との知恵比べ勝負となる。勝てば強烈な引きのご褒美が楽しめる。



⑤荒川本流 C&R-ルアー、フライ、テンカラ(埼玉県)

秩父の荒川本流栗谷橋付近から秩父鉄道鉄橋までの区間約2kmに設定されている。本流という名前の通り川幅が広く水量も多いので、フライ釣りではダブルハ

ンドロッドでの釣りが主流となる。放流場所になっている栗谷橋下流のプールでは釣り人がステップダウンすることがルールになっているので、プール内のどこでも狙うチャンスがある。ただし、幅広い川幅を超えて対岸ギリギリにフライをプレゼンテーションする必要があり、腕が試される釣り場と言える。近場でダブルハンドロッドでの釣り練習をするのにお勧めの釣り場である。

⑥早川(小田原地区)―ルアー、フライ、テンカラ(神 奈川県)



芦ノ湖から流れ出し小田原で相模湾に注ぐ早川の太 閣橋付近の約 1.5km に設定されている。2021 年から 始まった釣り場である。中流域渓相の広い川幅の中に 堰堤、落ち込み、プールや瀬が連続している。魚は 30~60cm 超が区間全域にストックされているので、どこでも釣りができる。見える魚をサイトフィッシングで狙ってもよいし、深場や岩陰に潜む魚をブラインドで狙ってもよいし、深場や岩陰に潜む魚をブラインドで狙っても面白い。冬場でも暖かい釣り場のおかげでプールではライズも多く、ドライでも楽しめる。

以上、関東圏の冬季 C&R を紹介させていただいた。 関東からのアクセスのよい冬季 C&R にはこれら以外にも、山梨県の小菅川、静岡県の鮎沢川、黄瀬川、潤井川などがあり、どこも魅力ある釣り場である。特に静岡県の釣り場は冬場に寒い思いをせずに釣りが楽しめる。従来、禁漁期に釣りを楽しむためには人工池を使った管理釣り場に行くのが一般的であったが、自然な川で釣りが楽しめる冬季 C&R が増えたことは大変ありがたい。これらの釣り場はその川の漁協に運営されていて、どこの漁協も人手不足の中、大変なご努力をされながら釣り場を提供してくれている。我々利用者は釣り場環境の維持に協力し、ルールを守りながら利用することが大切である。

小さな絶滅危惧種調査

小松澤 誠一

JOFI 東京の活動の中で、栃木県渡良瀬川水系の川 虫生態調査を行っています。

活動内容を大雑把に説明しますと、地域の子供達と一緒に近くの川で川虫を採取し、その川虫を種類・大きさ・個体数などで分類し、その集計結果からその川の環境状態を知るという内容です。

この活動を通して、川虫研究の専門家と知り合うことができ、一緒に先生の活動に同行させて頂くことができましたので、今回はその時の貴重な体験について紹介させて頂きます。

私が川虫の生態調査に同行させて頂いたのは茨城 県在住の K 先生で、主に「カワゲラ」の生態調査を専 門とされています。

中でも、茨城県の絶滅危惧種に指定されている 3 種のカワゲラ目である、「フライソンアミメガワゲラ」、「シノビアミメカワゲラ」、「トワダカワゲラ」の研究をされており、年間を通して那珂川の河口付近から福島県の県境付近に至る広い範囲で研究活動を実施されています。

私が最初に同行させて頂いたのは、冬真っ只中の12 月初旬でした。

手始めに、中・下流域で生息が確認されている「フライソンアミメカワゲラ」の採集からはじめました。

川の流れの変化というのは、台風・大雨等の影響によっても大きく左右されますが、一番の大きな要因は護 岸工事です。

あらかじめ、3 ヵ所ほどポイントの候補を挙げていましたが、初めの 2 ヵ所は護岸工事によって川虫採集ができるような状況ではなくなっていました。

残りの 1 ヵ所は例年通りの状況を残しており、無事採 集活動を実施することができましたが、この活動を継続 していることの難しさを痛感させられる出来事となりまし た。

初めての採集作業ということもあり、やり始めは思うように川虫採取することができませんでしたが、浅場のチャラ瀬を丹念に探し続けていると、全長 15mm 程の「フライソンアミメカワゲラ」を何とか捕まえることができました。



このカワゲラは、とても小さく際立った特徴がないため、 素人には非常に分類が難しい種類です。

私も先生に気づいて頂くまでは「小さくて弱そうな水生昆虫」くらいにしか見ていませんでした。

次は、八溝山麓付近の那珂川上流域に生息する「シノビアミメカワゲラ」の採集です。

このカワゲラは、10月から3月にかけての冬の間だけ川で幼虫の姿を確認することができるそうで、自然界での成虫への羽化や産卵行動を確認したことはまだないそうです。

こちらの採集作業もなかなか難しく、作業を始めてから小一時間ほど経った頃、日当たりが良く、流れの緩やかな支流の玉石の下から、全長 30mm 程の「シノビアミメカワゲラ」をようやく採取することができました。



このカワゲラは非常に特徴的な容姿をしていて、一度 見れば素人でも直ぐに分類ができます。

黄と黒のコントラストがはっきりしていて、大きな頭とつぶらな瞳を持つ、何とも言えない愛らしいカワゲラです。

「トワダカワゲラ」は「シノビアミメカワゲラ」と生息場所が似ているということでしたが、その後数箇所で調査を続けましたが、残念ながらこの日は「トワダカワゲラ」を採集することはできませんでした。

年が明けて翌年の 4 月、「トワダカワゲラ」と、羽化直前にまで大きく育った「シノビアミメカワゲラ」を採集することを目的として、再び同じ場所に同行させて頂きました。

この日は天気にも恵まれ、少し暑いくらいの陽気でしたので、採集作業も順調に進み、直ぐに全長約50mmの「シノビアミメカワゲラ」を採集することができました。羽化直前には60mm程度まで成長するそうです。

先生から研究室で羽化させた成虫の写真を頂きましたので、参考に掲載します。



一時間ほどで 3~4 匹ほど採集できましたので、「トワダカワゲラ」の採集実績がある別の支流に移動することになりました。

前回も採集活動を行った場所でしたが、時期が変わった影響なのか、今回は「トワダカワゲラ」を 7~8 匹採集する事ができました。



このカワゲラも実に特徴的な容姿をしていて、四角く 張り出した背中と、尾の先に毛のように生えたエラが印 象的でした。

その沢では、今まで「シノビアミメカワゲラ」の採集実績は無かったのですが、この日は運良く「シノビアミメカワゲラ」を採集することもでき、新しい情報も得る事もできました。

今回紹介した 3 種類のカワゲラは、茨城県の絶滅危惧種に指定されている訳ですが、実際にその姿を見ることができてしまうと「絶滅」とは程遠い存在にも思えてしまいます。

しかしながら、長年研究している先生の話によると、沢の上流部の木が伐採されただけで直ぐに姿を消してしまうとのことで、毎年採集できるような沢は非常に貴重なのだそうです。

このような沢が末永く残ってくれることを期待すると共に、環境保全の難しさを強く感じさせられました。

私は「釣り人」であり「川虫研究者」ではありません。 つまり、「川虫の研究にはそれほど興味が無かった」というのが本音ですが、毛鉤釣りの大先輩から「君も毛鉤釣りをするなら、川虫のことは知っておいた方が良いよ。」と言われたことがきっかけで、川虫の調査に参加してみようと思った訳ですが、実際に体験してみると実 に面白い活動です。

捕食されているであろう水生昆虫の生態が分かれば、 それだけ釣果にも繋げ易いということもありますが、夢 中に昆虫採集をしていると、童心に戻ったかのように時 間の経つのを忘れてしまいます。

川で釣りをする方であれば、一度は経験しておいても 損は無いのではないかと思います。

場所によっては、ヤマメの稚魚やカジカが網に入ったりするとこともありますので、「釣り人」としても違った楽しみ方をすることが出来るのではないでしょうか。





最後に、今回紹介した 3 種のカワゲラは「釣りの餌に向いているか?」という風に考えてみますと、残念ながら「良い餌になるような種類だとは思えない。」というのが率直な感想です。

個体数が少ないと言う事は、それだけ魚の主食にもなり難いという事もありますが、色味や容姿から「あまり美味しそうに見えない」というのが個人的な偏見です。

この採集活動は非常に貴重な体験でしたが、残念ながら毛鉤作りの参考にするのは難しかったように感じます。

機会があれば、成虫の採集活動にもご協力させて頂きたいと思っています。

米国におけるライセンス制度について

鈴木 伸一

以下の『・・・・・』は私が所属する日本鮎毛バリ釣り団体協議会会報誌「鮎毛バリ通信」No.33、およびNo.35の原稿(鈴木投稿分)です。昨年度、一昨年度の釣りインストラクター講習の際にも補助資料として使用しました。

転載の理由は、(1)最近は内水面漁協も高齢化が進 み漁場管理に支障を来すようになってきた。(2)それで は日本でもライセンス制度を導入してみては?との安 易な声も聞かれるようになってきたが、果たしてライセ ンス制度の本質を知っての意見であろうか?(3)当たり 前のように使用されている「キャッチ・アンド・リリース」 (海外から導入されたカタカナ用語)と言う用語もそうで あるが、ライセンス制度に関しても「ライセンス制度」と 言う言葉だけが一人歩きしているに過ぎないように思 われてならない。(4)日本の内水面遊漁(釣り)の将来 を考える際に、米国におけるライセンス制度を知ること は大変参考となる。(5) 初代釣人専門官 櫻井政和氏 が平成26年2月 水産庁に報告した「米国における 遊漁(釣り)の振興制度の実態調査 報告書」の全文を PDF 化し、教育用資料とすることの許諾を櫻井氏自身 から得た。と言うことで近々JOFI 東京においても米国 のライセンス制度の勉強会を開催したく、その取っ掛か りの一助となればとの思いからです。

『全日本釣り団体協議会が発足した当初(1971年)、 釣り人は、法の中では正しく位置づけられた存在には なく、各都道府県の漁業調整規則の中では非漁民とし て取り扱われていた。非漁民と言えば、漁民以外の者 を指す言葉で、投網、手づかみ、果ては毒流しなど(さ すがに法律には抵触する漁法も含まれるが)を行う者 を含め十把一絡げにした表現である。

最近になって漸く「遊漁」という言葉は存在するようになったが、「遊漁」でさえ、70年ぶりに改正されたばかりの漁業法においても、第八章内水面漁業第百二十九条に『内水面における第五種共同漁業の免許を受けた者は、当該漁場の区域においてその組合員以外の者のする水産動植物の採捕(以下「遊漁」という。)について制限をしようとするときは、遊漁規則を定め、都道府県知事の認可を受けなければならない』とあるくらいである。そして、釣りに関する法律と思われる①水産基本法、②漁業法、③水産資源保護法、④漁業調整規則、⑤遊漁船業の適正化に関する法律、⑥外来生物法において、文字検索をしても漁業の1手法として「釣り」の記述はあるものの、「釣り人」と言う記載は見つけることはできない。我国において、今後も法律的には「釣り人」は存在し得ないのであろうか?

一方海外ではどうかと言えば、欧米の先進国では狩

猟、釣りはライセンス制度の下、国レベルで統括して厳格に管理されており、釣り人は確固たる地位が確保されている。例えば米国においては、「釣りの振興」を図ることが政府の重要な任務として認識されており(Sport Fish Restoration Act(Dingell-Johnson DJ)1950)、「レクリエーショナルフィッシングに関する大統領令(1995)」により、連邦政府は「釣りの振興」と「野生生物としての魚類の管理」を連携させた施策を推進するとされている(その仕組みについては、水産庁初代釣人専門官 櫻井政和氏が「我が国と米国の「釣り施策」」(水産振興 第565号 東京水産振興会編集・発行)にまとめられているので参照されたい)。

SFR のための財源は、①ライセンス収入、②釣り人が 釣り具やボート燃料などを購入する際の間接的課税で あり、ライセンス料などはすべて法の下に魚類資源の 回復、保存、管理のみに充てられる(行政の役割)。釣り人は州に応じて定められたレギュレーションを守るこ とにより魚類資源の回復、保存、管理に協力し、結果 的に釣り場の持続性が保持されることになる。

ニュージーランドにおいても、同様な仕組みで魚類資源の回復、保存、管理が行われ、ライセンスを購入するとルールブックが手渡され、その先頭には"That fish populations are maintained and that the number of fish caught do not threaten the sustainability of the fisheries "*1と明記されている。それほどにも、欧米では魚族は大切な資源であって、Bag Limit や Catch & Release と言った言葉が存在するように、例え Catch & Eat の英国であってさえも必要以上に魚を釣ることは控えられてきた。また、Catch & Release であれば、釣り場保全を目的としているため、魚に不必要なダメージを与えないような釣りをするのが原則であり、バーブレス・フックの使用は勿論のこと、釣り上げた魚をそのまま素手で掴かんだりするようなことはしないものである。

我が国においては、内水面における釣り場保全は漁協の役目と漁業法に定められている。ところが、近年漁協も高齢化が進み、その役割を果たすのが困難な状況になってきた釣り場も数多くあると聞いている。元来、釣り人とは群れや他人からの指図を嫌い、(勿論、他人には迷惑を掛けない、自然には優しい)、人目を忍んで好き勝手に釣りを楽しむ人種(個々)を指す言葉かもしれない。が、ここは釣り人が市民権を得る好機と捉え、大切な釣り場保全のためにも、今後は釣り人も魚類資源の回復、保存、管理の一端を担っていくように考えてみてはどうであろうか?

(釣り人の役割について)』

『キャッチ・アンド・リリース(Catch & Release)と言うフレーズを耳にしたことのない今どきの釣人は、果たしていらっしゃるであろうか? それほどまでに一般化してき

たキャッチ・アンド・リリース、文字通りに釣り上げた魚を 再び水に戻してやることと言うだけで済ませて良いもの であろうか?

今から 10 年ほど前のこと、私が World Fly Fishing Championship in Scotland (競技は勿論キャッチ・アンド・リリース)に Team Japan の選手として参加したときは、知っていたつもりのバーブレス・フックに関し、まさかのカルチャー・ショックを受けてしまった。

その当時、わが国では太軸のバーブレス・フックを手に入れるのが困難だったこともあり、バーブはペンチで潰してやれば世界大会のルールに叶っているものと高を括っていたのであるが、現地に着いてびっくり!審判(Controller)はバーブレスか否かを判定する際に厚めの布を使い、フライの針先を布に刺し、引き抜いたときに布の繊維が少しでも引っ掛かれば(少なからず魚の口に傷がつくはずで)バーブレスとは認めないとのことであった。

これで、何が言いたいのかお分かり頂けたものと思う。 キャッチ・アンド・リリースは、元々釣り場環境保全を目的としたスポーツ・フィッシングの一手法である。リリースした魚が生き続けることが出来ないようであればキャッチ・アンド・リリースとは言えないということである。魚に不必要なダメージを与えないような釣りをするのが原則であり、真のバーブレス・フックの使用は勿論のこと、取り込みに時間を掛け過ぎたり、釣り上げた魚をそのまま素手で掴かんだりするようなことは決してしないものである。

(キャッチ・アンド・リリースについて)』

※1「魚の個体数が維持され、釣られた魚の数が釣りの 持続可能性を脅かさないこと。」

2021 年度活動実績

日付	活動実績
3/27(土)	ヤマメ発眼卵 BOX 回収&
	稚魚放流
	(JOFI 西東京に協力参加)
10/10(目)	第6回「ファミリー釣り教室」
	(釣り指導・サポート)
	若洲シーサイドパークグル
	ープ・(公財)日釣振東京都
	支部 主催
10/24(日)	水難事故防止セミナー
	(危険回避、ライフジャケット
	の動作検証、救助方法等)
	渡良瀬漁業協同組合、
	JOFI 東京 主催
	水産庁、足利市消防本部、
	全国内水面漁業協同組合連合会、栃木県漁業協同組
	団体) 協力
11/6(土)	ヤマメ発眼卵 BOX 埋設
11/0(11/	(JOFI 西東京に協力参加)
11/13 • 14	2021 年度全釣り協公認釣り
(土・目)	インストラクター資格講習・
	試験
	(講師・スタッフを派遣)
1/21~1/23	釣りフェスティバル 2022
(金・土・日)	(オンラインによる情報提供
	にて参加)
毎月第2土曜日	若洲海浜公園釣り場におけ
	る釣り場クリーンアップ、及
	び釣り指導

編集後記

長期にわたる COVID-19 の感染拡大の影響により、 本年度も多くのイベントが中止となりました。

ワクチン接種や個人の感染対策の意識も高まり、感染者数が減少する傾向にありますが、新種のウィルスが登場するなど、未だ予断を許さない状況が続いております。

10月に入ってから、何とか数件の行事を実施することができましたが、ここで安心することなく、引き続き感染拡大の防止を意識して頂き、安心した生活が送れるように協力し合っていきましょう。

また、例年同様、豪雨等による自然被害の甚大化が続いております。

自然との共存が必須となる「釣り」というジャンルにとっては、切っても切り離せない脅威となり得ますので、天

候変化の事前確認やライフジャケットの着用等の安全 対策を講じた上での釣りを励行して頂けますよう、引き 続き宜しくお願い申し上げます。

今回の会報も昨年同様、特にテーマを決めずに執筆者の自由なテーマで原稿作成をお願いしました。

JOFI 東京の活動にも多くの制限を受け、ご自身の釣りも思い通りとならなかった状況での執筆になったのではないかと思います。

執筆者の皆様、会報発行にご協力頂きまして有難うございました。

本会報誌は皆様からの寄稿の様子を見て、適宜特集を組んで発行していきたいと考えています。

原稿は随時募集しておりますので、会員名簿を参照 し広報部宛に Eメールや郵送などでお寄せ下さい。

原稿の集まり具合によっては期限を設けて執筆依頼 をすることもありますので、その際はご協力をお願い致 します。

(広報部)

東京都釣りインストラクター連絡機構会報誌 第10号

発行日 2022年(令和4年)2月11日

発行 JOFI 東京

(一社)全日本釣り団体協議会 公認 東京都釣りインストラクター連絡機構

編集 同上(広報部)

URL https://jofi-tokyo.org/

